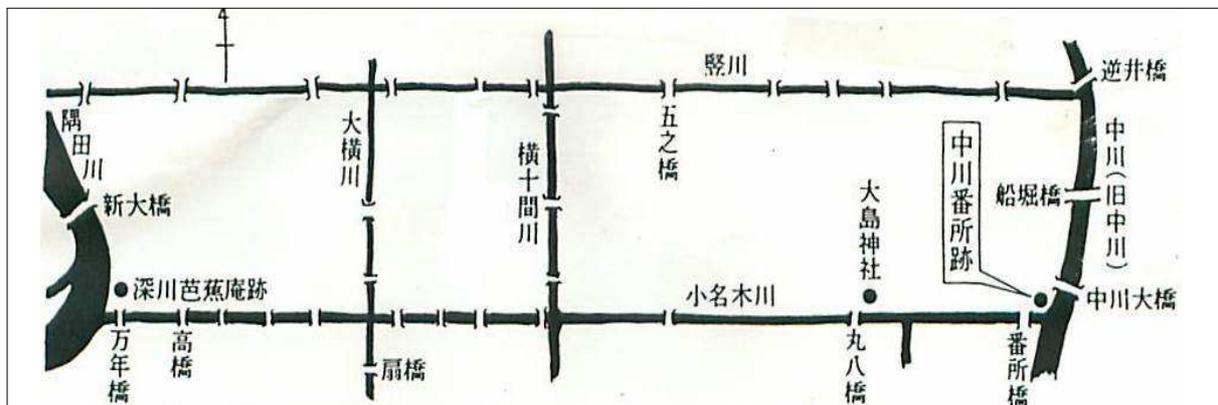


なか かわ ばん しょ
中 川 番 所

江戸時代、中川(現在の旧中川)と小名木川おなぎがわの交差するところに、「中川番所」がありました。それは小名木川を通行する船を改める「関所せきしょ」でした。関所というのは、そこを通過する人や荷物を改める場所で、定められた条件にみたない場合は通行させませんでした。中川番所は、最初は深川の万年橋まんねんばしの北側にあって、「深川船改め番所」とよばれていました。移転した理由ははっきりしませんが、寛文元年(1661)に小名木川の入口にあたる中川口に移り、名も「中川番所」と改めました。

中川番所の仕事については、寛文元年(1661)の高札に、江戸から出る船は夜中通さない。往還おうかんするものは顔をはっきり見せる。女性は証文があっても通さない。鉄砲は二・三挺までは改めた上で許可する。人間が隠れることができる大きさの荷物は中を調べてから通す、と書かれていました。

しかし、とくに事情のないかぎり人間の通過は厳しくなかったようですし、女性も結婚や神社仏閣への参詣のための通行は許されていました。これは、中川番所が川船による物資の輸送の実態を調べたり、取り締まったりすることを最大の仕事としていたからです。江戸へ入る物資の量や品目を統制し、物価の変動を調整しようとしたのかもしれませんが。



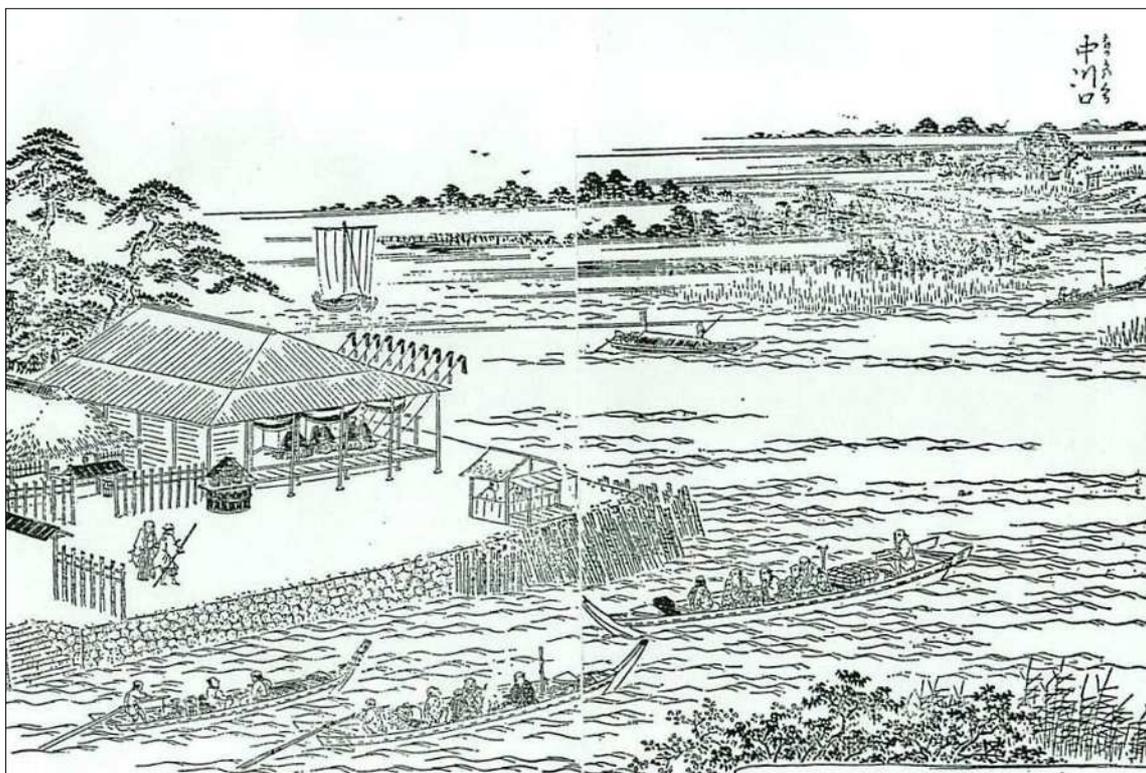
現在の小名木川とその周辺

たとえば江戸に運ばれる米(年貢米や金銭に換えるための米)は、どこの村から来て、誰がどこへ納める米か、はっきりしないものは通行できませんでした。酒や塩・鮮魚・野菜も同じで、一部の生鮮食料品以外は、夜の通行も禁じられていました。

江戸川区の村々は、江戸時代から野菜の栽培が盛んで、江戸の町が発展するにしたがって、その生産量も増えています。多くは船で、新川や中川を通過して中川番所から小名木川に入り、江戸へ運びました。野菜は鮮度が勝負ですから、ほとんどは夜中のうちに運びだします。

ところが、幕末になって世情がさわがしくなりはじめると、文久元年(1861)に幕府は一切の夜中の通行を禁止するようになりました。困った江戸川区内の村人は、今まで通り夜中の野菜運搬を認めてほしいと、何度も中川番所たんがんしょに嘆願書を出しました。結局、この1年半後にようやく夜中の野菜運搬が認められるようになりました。これは、江戸川区の村々で作られる野菜が、江戸の町の人々の必需品であったからだと思われます。

明治2年(1869)に全国の関所が廃止され、200年以上川船の航行を取り締まってきた中川番所も廃止されました。



中川口の中川番所(『江戸名所図会』より)

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)